

ソーシャルワーカーこそがレジリエンスを育てる

講師:マイケル・ウンガー (Michael Ungar)
(レジリエンス研究所主席研究員/ダルハウジー大学)
通訳:渡部律子 (日本女子大学)

司会 ウンガー先生は、カナダの東海岸にある、ダルハウジー大学のレジリエンス研究所の教授、ならびに主席研究員として研究を進めておられます。さわめてたくさんの研究業績をおもちです。25 ページに、ウンガー先生の紹介をしておりますので、詳しくはそちらをご覧ください。

なお、この基調講演では、日本女子大学教授で本学会理事の渡部律子先生に通訳をしていただきます。それではウンガー先生、渡部先生、よろしくお願いいたします。



Dr. Ungar

おはようございます。今日ここにお招きいただきまして、本当にありがとうございます。秋山先生が、私の話の前に、非常に良い地ならしをしてくださったと思っております。個人的に申しあげますと、今回お招きいただきましたことを、とてもうれしく思っています。それはここで、レジリエンスのお話をできることが、とてもいい機会だと思ったからです。カナダ人として、昨年3月の東日本大震災以来、私たちもずっと日本で起こってい

ることを見続けてきました。

20 ヶ国以上の国でずっと私は調査の仕事をしていますが、レジリエンスを想定するのに使える考え方というのは、プロテクティブ・メカニズム、先ほど秋山先生のお話にありましたように、保護的メカニズムです。

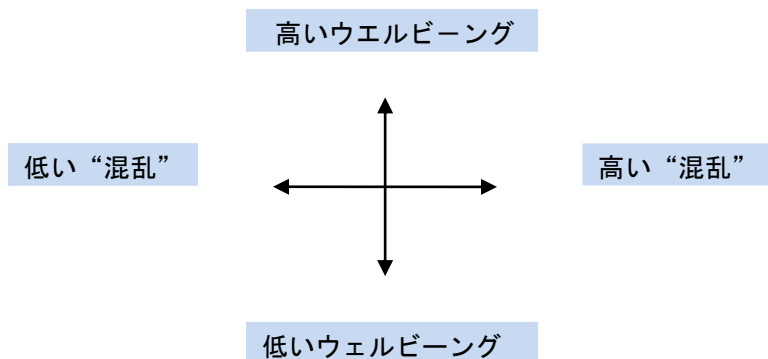
特にお招きいただいたことで嬉しかったのは、ソーシャルワーカーからお招き頂いたということです。レジリエンスという概念と研究は、主に心理学や精神医学の研究者によって、ある意味、独占されてきたと言ってもいいと思います。

しかしながら、今日私がここでお話を展開したいのは、もっと系統的、そしてエコロジカルな視点に立つ方が、レジリエンスの理解が容易になると言う点です。また付け加えますと、ソーシャルワークを研究する方が、翻訳をしてくれるということは、とても嬉しいことです。

レジリエンスという考え方は、私たちがソーシャルワークで行っていることと非常に良く適合するものだと考えております。その理由は、私たちが行っていることは、人々への援助のなかで、対象となる問題を変えるのではなく、能力、そして強さを作り上げていくということに強調点を置いています。ここにあるのが、メンタル・ヘルスで使われていたモデルです。これは WHO で使われていて、これまでの研究で支持されている考え方です。2つのディメンション、混乱があるかどうかということで、低い混乱、高い混乱。

<通訳者からのコメント：ちょっとここで注釈を入れますと、皆様がお持ちのこの冊子のなかに、スライドが入っております。これは秋山先生が翻訳をしてくださったものです。昨日、秋山先生から、関東学院大学での講演ののち、先生ご自身、ちょっと違った訳をしたほうがいいのかもわからないものがある、というふうにご指摘いただき、意味を少し変えて訳して良いと言っていただきましたので、皆さんお持ちでらっしゃいます訳は、そのままではない、意識をさせていただくことをご了承頂きたいと思います。>

私たちがソーシャルワーカーとして行うことは、ディスオーダード・ビヘービアといわれる、混乱した行動を変えていくことであります。暴力、虐待、依存、自殺傾向などです。しかし乍ら、それは私たちの仕事の一片にすぎません。もしワーカーがこのような混乱を取り除いたとして、何が残るとお考えでしょうか。暴力が、もし取り除かれたとしたら、クライアントは本当に社会で上手く機能する人になるでしょうか。そのために、ここに提示したモデルには、ウェルビーイング、高いウェルビーイング、低いウェルビーイングと、皆様のお手元の資料にありますが、この様なディメンションがあるわけです。



たとえば、先ほどのように、暴力がなくなり、自殺を考えなくなったことが、本当にクライアントの高いウェルビーイングが獲得した事になるか、また自分自身に対する評価が高くなったといえるか、という疑問が残ります。

統合失調症で、かなり症状の重い方であっても、友人を持っている人がいるかもしれません。私たちソーシャルワーカーの仕事はこのような問題行動をなくす、もしくはそれを軽減するだけではなく、それ以外の強さを作り上げていくことをよく知っています。このような理由でソーシャルワーカーがレジリエンスを考えることは、非常に適切であると考えerわけです。

レジリエンスの典型的な定義は、個人が持つ生き延びるための力、というふうにいわれております。しかし乍ら、私はそのような定義が正しいとは思っておりませんし、好みません。プロテクトイブ・ファクター（保護要因）を考えている私の研究では、このような定義を支持することはできません。もし災害で家を壊されてしまった人たちを目の前にしたとき、その人たちが立ち直れる力は、その人の内部にあるというふうに断言できるでしょうか。もしその人たちが、高い自己尊重の感覚を持っていれば、すべての問題は解決されるかと考えるでしょうか。私たちが今考えなければいけないのは、内的な質といえますか、その人が持っているものではない、違う側面です。それは地域に基づいたクオリティ（質）です。個人の内面ではなく、外部に存在するものだと思います。

もしレジリエンスが、アメリカのジョン・ウェイン（西部劇のヒーロー役）のような、非常に強い人格・性格を持った人の中にあるもの、としてしまえば、私たちソーシャルワーカーの仕事は、屹度なくなってしまうと思います。この様な人は自分の問題を自己解決出来るのです。我々の調査とその結果を見ると、人が変化できる可能性を、どこに見つけるかということが大切です。現実にはエコロジカルな社会要因のほうが、個人要因よりも、大きな理由を見つけることができるのです。また、個人要因よりも、エコロジカルな社会要因のほうが、問題解決の成否の理由が説明できるのです。そのため、各国で行われている研究を基にしてみても、レジリエンスは、ここに私が書かせていただいたような定義のほうが、より適切だと思います。

皆さんがお手元にお持ちの定義を見ていただければ おわかりになると思いますが、私はここで2つの鍵になる概念を、皆さんにちょっとご紹介したいと思います。

一つ目は、ナビゲーションという考え方です。その環境から、自分がきちんと何かを得ることができるという時は、内的な力ではないということです。環境が持っている力が、資源となって、本人が使えるかどうかということです。同時に、それは本人に影響を与えます。もし皆さんが海で遭難したとして、自分がどこかに漂着できるという希望がないことを想像してみてください。それは生きる意欲をなくすことになると思います。

二つ目の大きな概念は、ニゴシエーションです。資源を上手く使って、自分の問題に立ち向かっていける人たちが、一体どのような形でその資源を使えるかということ、その資源が、その人たちに適した形になっているかということです。たとえば、私の国カナダで、ジェロントロジー、高齢者福祉で大きな問題があります。カナダにはナーシングホーム（居住型高齢者ケア）、日本の特別養護老人ホームに匹敵するのがあります。そこに入所してもらおうとしております。しかしながら、皆さんがよくご存知のように、多くの高齢者は、むしろ自宅で暮らしたいと望んでいます。保護的な側面を考えると、もちろん安全な、心

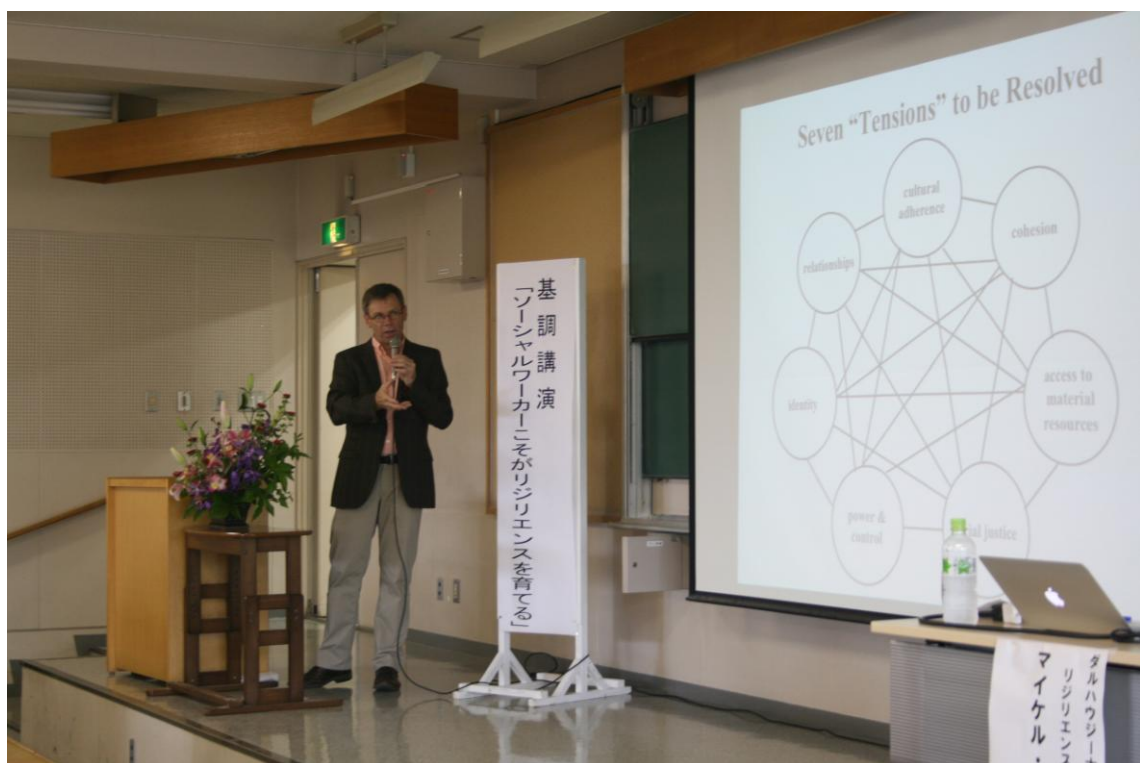
配しなくていい住居を確保するということには意味があります。しかし、考えなければいけないのは、先ほどの用語を説明しました、ニゴシエイトというものの、そこで提供されるケアというものがその個人にとってどのような意味を持つかということです。

それからもうひとつ大切なことは、そのように何かの介入がなされたとき、その結果を左右する大きなポイントは、一体誰が、つまり援助を受ける当事者が力を持つのか、それと援助している側が力を持つのか、そのパワーというものの存在を認識しなければなりません。つまりリジリエンスを考えると、ニゴシエーションということとナビゲート、この2つの鍵になる概念を考えなければいけないのです。

リジリエンスというのは、人が大きな災難、困難、もしくは逆境にさらされたとき、その人のウェルビーイングを保てるようにする力です。その力は、個人が持っている心理的、社会的、文化的、身体的資源を見つけ出して使えるようにする力であるのです。ニゴシエイトとは、つまり本人が見つけ出して使えるようにすることを意味します。でなければリジリエンスには至らないということになります。

それと共に、前述した資源が、その個人にとって意味を持つようなやり方で提供されるようにしていくことが必要です。つまり、資源は提供されるだけではなく、その人の価値観にマッチした使い易いものとし、その人のウェルビーイングが高くなるやり方で提供されることが必要です。そしてリジリエンスの力は、個人が持つ力と資源のみならず、その人を取り巻く家族や地域、社会などの力も含めて考えなければなりません。

リジリエンスの理論というのは、ソーシャルワークに取って代わるものではなく、ソーシャルワークの基礎（アプローチ）として使う考え方と言えます。



簡単な事例をお話ししたいと思います。私は今も臨床家として仕事をしていますが、私は最近若い男の子を紹介されました。彼は住んでいる地域でいじめを行っていました。アフリカ系カナダ人の男子で、白人の多いところに住んでいて、周囲の人々から色々とかいかの言葉を投げかけられていました。私に与えられた課題は、彼が他の子どもたちに対するいじめを止めさせることでした。しかしながら、別な側面から、この状況を考えると、私の仕事は、より複雑なものになりました。つまり先ほど言ったような、単にその行動を止めさせること以上のものになったわけです。私が彼から話を聞いているうちに、彼が他の子たちに対していじめの行動をすることは、彼にとってある意味で適切な行動ということが分かってきました。

レジリエンスの研究は、プロテクト・メカニズム（保護的・防護的機能）というものを考えています。彼は非常に危険な状況の中にいて、自分自身を助け出す方法を見つけたわけです。私たちが非常に敏感にならなければいけないのは、この側面です。つまり彼は、自分自身を護るために、そのような問題行動や他の人に注目されるような事をしなければならなかったわけです。

私はこのような状況を理解することができたので、その子ども自身を変えるのではなく、環境を変えることに力を注ぎました。そこで、通う学校を変えたのです。彼と同じような子どもたちが沢山いる学校に移ったとき、彼は、より保護的な環境の下に移ることができました。つまり彼の行動を変えるのではなく、彼を護ってくれる環境にすることによって、彼の行動は変化したわけです。現実的に考えて、一体私は何をすべきだったのでしょうか。学校に行って、いじめられても、いじめ返すなどということだったのでしょうか。これは何と愚かなことでしょうか。プロテクト・メカニズム 保護的メカニズムを、文脈、つまりその人が生活している環境をしっかりと考慮して考えることで、最終的には、彼の行動パターンを変えることに成功したわけです。

レジリエンスを育成していくために、私たちソーシャルワーカーが他の専門職に優る点は、ここにあるような8つだと言われています。

1. 好奇心や興味・関心が強いこと
2. 事情背景の脈絡をアセスメントすること
3. 間接的（非核心的）実践ができること
4. 複雑さを包摂すること
5. 非定型的（紋切り型でない）解決の優位性を知っていること
6. 文化特性や文化的関連性を明示できること
7. 人々のウェルビーイングを目指した誘導を支援すること
8. 人々にとって意味ある（人・状況・環境）を見いだす支援をすること

私が強調していることは、そのディスオーダーといわれる行動を抑制することではなく、プロテクト・ファクターを作り上げていくということです。そのために一番大切な最初の要因は、他者に対して好奇心を持つということです。彼らがどんなふうに問題を解決しようとするのか、ということに関心を持つことです。私たちがこのプロテクト・メカニズムの研究をするときに、世界のいろんなところで若者たちが困難な状況に遭ったと

きに、どんなふうにして困難に対処しているかを見ていくことです。

ひとつの研究方法は、質的研究に向けられたものです。現在7ヵ国以上のところで、私たちは、子どもが起きてから寝るまでの、その間の時間を映像化しております。たいていの場合、土曜日です。そこで私たちが何を目的にしているかということ、子どもたちが危険な行動や、問題のある状況に置かれたときに、どのようなことをしてその状況を切り抜けていこうとしているのかを把握・理解することです。

都市部で出会ったネイティブの少年のケースがあります。中国、インド、南アフリカ、さまざまな国で私たちはそのような同じことをしています。この少年は、小さいときに暴力から逃れるために、家庭を出て里子に出されました。しかしながら彼は、学校で薬物を使うこともなく過ごすことができました。私たちが非常に興味を持ったことは、なぜこの子がこうやって生き延びているかということでした。もし私たちがそのことを直接彼に尋ねたとしても、おそらく彼は答えることができなかったと思います。彼は自分の内的な経験を、言語化することができなかったと考えます。彼の防御的メカニズムというのは、彼にとって非常に新しいことです。しかしながら、そのビデオに撮った彼の行動を、私たちと一緒に彼に見てもらったとき、私たちは共に非常に興味深いパターンを見つけ出すことができました。

これからもう少ししたら、皆さんに見ていただくのですが、ひとつのパターンは、彼が里子に行っていたその家は、彼のエクステンデッド・ファミリー（拡大家族）という、縁遠い家族、親戚ですが、そこで非常に親密であったということです。そのおかげで彼自身、自分のアイデンティティや、文化を保つことができていたのです。そしてその親族たちと共に、彼は関係性を保つことができていました。しかしこのなかでも特に興味深かったのは、それらの親族のなかで、彼自身が非常に強く、自分を同一化（アイデンティファイ）できる人物を見つけ出したことでした。なぜできたかということ、彼が自分よりも年下の甥や姪のケアをしていたからです。彼自身が、他の誰かにとって、意味のある役割を持つことができたのです。私が今申しあげたようなことは、子どもの精神衛生にとって、非常に役に立つ、防御的に働いてくれることなのです。

（映像開始）

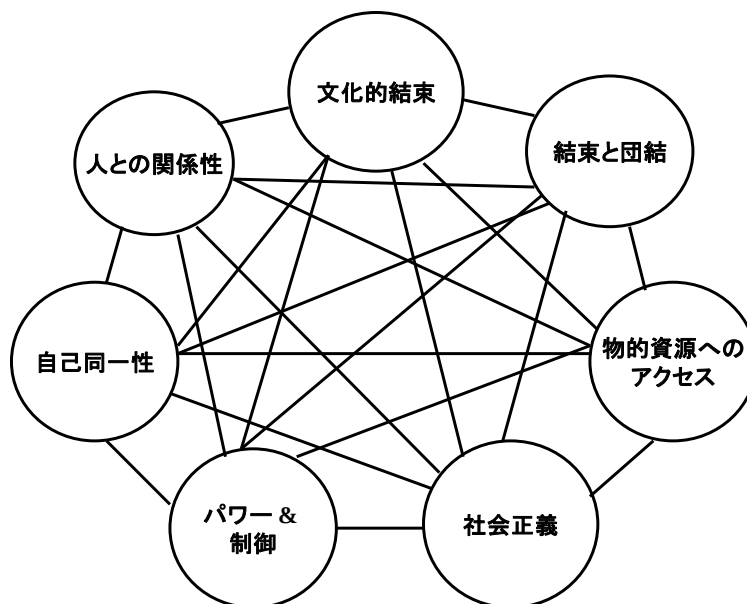
彼が非常にユニークな形でこのことを達成しているところを見て頂きたいと思います。スクリーンの真ん中に登場するのが、これから私が皆さんに見て頂きたい少年です。その周囲にいるのは、彼の甥や姪、そしていとこ達です。皆さんに一点わかっていただきたいのですが、この彼と一緒に住んでいる環境というのは、その近隣はギャングのメンバーが多数いるという、非常に危険な環境であります。薬物を売買したり、それから銃を持って、銃を使ったりする人たちです。しかしながら、ここを彼は自分で安全と感じ、そして自分自身が価値を認めてもらっていると感じているのです。私たちはここで彼の映像を撮ることがなければ、けっしてこのようなことを理解することは出来ませんでした。普通はそのような危険な状況下で、誰かが何かのメリットを得るというふうなことは極めて想像しにくいことです。

ちょっとここで止めます。皆さんは、おもちゃの銃を持って、赤ん坊と遊ぶでしょうか。おそらく皆さんはなさらないと思います。カナダでも極めて異常で、普通のことはありません。しかしながら、非常に興味深いことは、私たちが彼に、一体あなたにとって、防

御的な要素というのは何かということを聞き出していた時、彼は自分がそこに所属していると感じられ、この家族のメンバーと融合していることだと、自分自身で言ってくれました。しかしながら、私たちはソーシャルワーカーとして普通の考え方をするのであれば、このコミュニティから彼を引き離すのが最善ではないかと考えるでしょう。私たちソーシャルワーカーは、もちろん、その当事者と話し合いをし、一体何が防御的な機能を持つのかを見つけ出します。私がここで皆さんに申しあげたいのは、それが非常に複雑なものであるということです。つまり防御的メカニズムが何かということを考えるには、複雑な考え方をしなければならないということです。その戦略のひとつとして、私たちが持つべきことは、ソーシャルワーカーは、クライアント・・・この場合は少年なのですが、その相手に対して好奇心を持つということなのです。

二番目は、私たちはその構造もしくは文脈に沿うというとはできると思いますが、前後の脈略をしっかりと考えたアセスメントを実行するということです。特に、我々が調査を基にして、レジリエンスの研究のなかで見つけ出したのは、この7つの領域のアセスメントです。

解決されるべき七つの“緊張＜張力＞”



これらのうちの幾つかは、皆さんにとっても非常に馴染みのあるものだと思います。ソーシャルワーカーとして特にここで着目しておきたいのは、社会正義 ソーシャル・ジャスティスということです。なぜかという、私たちが関心を持ち、そして注目をしなければいけないのは、社会のなかで適切に取り扱われていない、マージナライズ、社会からはじき出されているような人たちです。私たちはプロとして、これらの7つの要素のそれぞれの相互関係を考慮しなければいけません。

心理学者、もしくは精神医学の専門家の間でも、自己同一性や人との関係性ということに注目するかもしれません。しかしながら、私たちソーシャルワーカーは、社会正義や、

ソーシャルポリシー、ここには書かれていないのですが、政策などというものに注目します。そして地域が持っている価値や文化というものに着目します。つまり、これらの要素が、防御的な要因になるということを理解することは容易だと思います。通訳を介するため時間を取られますので、すべてこれらの説明はいたしません。少しとぼしたいと思います。

皆さんのお手元には、日本語の翻訳がございますので、また後ほど読んで頂きたいと思います。しかし私がここでひとつ皆さんに見ていただきたいのは、この写真です。私が今ご紹介しているのは、いろいろな国でなされている調査を基にした結果です。私たちが研究している国々の一つにタンザニアがあります。何年か前に、私は娘と一緒にタンザニアに参りました。娘は私の同僚の子どもたちと一緒に学校に行きました。

私が撮ったこの写真を、私はとても気に入っています。皆さんご覧になれると思いますが、私の娘はここにいます。私がなぜこれが気に入っているかといいますと、彼女の周りにいる子どもたちは、彼女とは見た目が非常に異なる子たちです。そしてその子たちの家族のほうで、ずっと兄弟姉妹が多いということです。私たちがリジリエンスということを理解するためには、まず最初に、さまざまな環境で育った子どもたちの声を聞くことです、この写真のように。

私たちがリジリエンスを理解するために必要なことは、この写真のなかで、私の娘が立たされている位置にある子どもたちの声を聞くことです。この学会参加者に非常に留意して頂きたい点は、防御的な機能を理解するために必要なことは、カナダやアメリカで起きていることを理解することだけではないということです。私たちソーシャルワーカーには、文脈といいますか、その人が暮らしている、生きている背景に着目するということの重要性が教示されております。

これが3番目の戦略につながっていきます。ソーシャルワーカーは、個人が持っている特性というものを超えたところにも着目いたします。暴力のなかにいる子どもたちのことを考えるときにも、その子どもの心理的な内的なことだけに着目するのではなくて、その子どもが生活している家庭の環境にも着目いたします。これを私は自分の著書のなかで、リセット・ライジングというふうに表示しております。

4番目はリジリエンスが、なぜ私たちソーシャルワーカーに有効かということに関係しますが、私たちソーシャルワーカーは、非常に複雑な問題と、そしてそれら複雑な問題に対する複雑な解決法に慣れているということです。2011年3月11日の津波の災害を、ちょっと比較をしたいのですが、3月11日の津波のケースと、私の身近（北米）で発生した台風、ハリケーン・カテリーナですね、それに遭遇したことと、比較してみたいと思います。

皆さんは、ニューオーリンズで起きたことをご存知だと思います。そのときに人々がした反応、非常に病的な反応をご存知でしょうか。子どもたちが学校に戻るのにどれだけ時間がかかったか、皆さんはご存知でしょうか。人々が新しい住居に移るために、どれだけの年月がかかったかご存知でしょうか。ひとつのことを挙げると、トラウマ・カウンセラーという、つまりカウンセラーへのアクセスは持っていました。しかし、それは非常に愚かなことに思われます。なぜかというと、このカテリーナの出来事は、非常に複雑な出来事だったからです。それに対して、たった一つの単純な解決法を持ってくるということは、

愚かだったと言うことができます。

それと日本のことを比較してみると、私は新聞やマスコミで得た情報しかありませんが、日本の子どもたちは、そのアメリカのケースと比べると、もっと早い時期に学校に戻ることができていたようです。もちろんたくさんの方が問題がまだ残っていて、私はそれを理想化しているわけではありません。しかしながら、自分の家が破壊され、そして愛する人たちを失うという複雑さを考えたとき、その人たちがレジリエンスを獲得するためには、そこに存在する複雑な要素を考えなければいけないということは当然のことです。トラウマ・カウンセリングは、もちろんいいことです。しかしながら、子どもたちを学校に戻し、そして子どもたちが自分の所属しているところを感じることができ、そしてそこへの所属感を手に入れることが大切なことはわかんと思います。

次の戦略に移っていききたいと思います。私たちソーシャルワーカーが得意としていることは、いわゆる典型的ではないやり方の対処法を大事にすることです。防御的なメカニズムというのは、個人が環境との関係性のなかで見つけ出すものです。危険な状況のなかで、一体何が最善の解決策かといえ、それは型にはまらない、普通では考えられないようなものであるかもしれません。というか、であらうと思います。もし、あなたが自分の性的同一性に対して問題を持つ子どもであるとすれば、そして家族や地域や学校のなかで、偏見を持って取り扱われるとしたら、家から出てよそに行ってしまうことが、たしかに機能的な解決法かもしれません。私が言っているのは、「子どもに家出しろ」とか、「出て行け」と言っているわけではありません。しかしながら私たちはエコロジカルに物事を考えると、このように環境が安心・安全なものにならないければ、その子どもは、その環境に戻れないと考えます。

皆さんにお見せしたかったこの漫画があります。私が子どものとき、カナダでは、もし悪い事をしたら先生は黒板のところに行かせて、自分がやった行動の反省として黒板に、何回も何回も書かせます。「私は他の子どもをぶつのをやめます」「私は宿題をちゃんとやります」「私は人に悪い言葉を吐きません」ということを何回も何回も書くわけですが。私がこの漫画を見たときに、私が調査と一緒にしている、非常に危険なところで暮らさなければいけない子どもたちのことを思いました。この子どもは黒板の前に行かされて、こんなふうに書いています。「私は脅迫的な行動をやめます、私は脅迫的な行動をやめます、私は脅迫的な行動をやめます、……」。そしてきっとこの子は、頭の中でこんなことを考えているはず。「こんなことをしても何も良くなるしない」。私が調査をするために、一緒に関わっている子どもたちは、その子どもたちと私がいっぱい話をすることにより、一体どういうものがその子たちにとって良い資源になるかを教えてくれます。

ひとつ、また新しい例を挙げさせてください。日本もカナダも、児童労働というものを禁止しています。しかしながら皆さんもご存知と思いますが、この労働している子どもたちは、実は労働を止めさせられたくないと思っているのです。なぜなら、子どもたちは、子どもとして働くことによって、さまざまな資源のコントロールを持ち、そして力を感じることができているからです。もちろん私たちは、児童労働を止めなければなりません。しかしながら私たちは、それをもし、今ご説明したようなその底にある複雑さ、そしてそのなかにあるプラスの側面を無視するとすれば、それは意味がありません。では、どんなことができるのか、といえ、子どもたちを学校に行かせることができるけれども、しか

し一日のうちの半分だけ学校に行ってもらおうというやり方です。それは、私たちが子どもたちと話し合いをすることによって見えてくる解決の仕方です。こうすることで子どもたちは、自分自身がコントロール感を感じつつ学校に行くことができるからです。このように、防御的（プロテクトイブ）メカニズムというのは、文化の側面を持っているということを強調したいと思います。

ここから、私の見解なのですが、出させていただいた例でも、私たち日本やカナダがダメだと思っているものが、その児童労働を行っている国があるという事実をしっかりと念頭におけば、そう単純には切り捨ててはいけない筈です。

社会心理学や、社会文化人類学を学んだことのある皆さんであれば、おそらく私が今出したケースの理由を、よく理解してくださることと思います。多くのレジリエンスの研究の成果が発表されるにつれて、レジリエンスというものが、個人の性格、特性に限定されないということが明らかになってきました。そこでどのようなことが分かってきたかというと、よりエコロジカルな理解が必要だということです。私たちソーシャルワーカーは、人が自分たちの持っている資源を上手に見つけ出し、そしてそれを活用できるようにすることを行っています。さらに私たちソーシャルワーカーは、その当事者とじっくりと話し合いをし、その人たちにとって最適な解決を見つけることも行っています。



これらのことを全体としてわかっていただくために、あるお話をしたいと思います。

私たちが人々のなかに、レジリエンスを作り出すと思っています。ちょっと前のことなのですが、私の同僚が、シェルターで仕事をしていました。このシェルターというのは、15, 16, 17 歳ぐらいの子どもたち（若者たち）が、安全な寝る場所を確保するために来る場所で、トロントにあります。これらの子どもたちは、暴力的で危険な家庭から来ている

る子どもたちです。そしてそのような状況に対応していくために、生きていくために、その子たちは、薬物依存になったり、売春をしたりします。しかしながら、彼らの考えでいけば、多くの行動がプロテクティブ（防御的）です。そこで私たちの仕事が何かというと、より社会で認められるようなやり方で、その若者たちが自分の生活を守っていくことです。

このシェルターにある夜にやって来た 16 歳の少女のこんな話があります。彼女はこのシェルターにやって来たときに、言葉遣いも悪く、下品な表現をしたり、それから非常に態度も悪く、問題がいっぱいでした。これが彼女と最初に会った時の状態です。彼女は、このシェルターにもっと頻繁に来ているお友達と一緒に来ていました。私の同僚が私に言ったことは、この少女は、「怒り」というものを使うことによって、ストリート生活＝路上生活に耐えているのだということでした。そのため彼女はシェルターに来たときも、路上で生き抜いていくために、彼女が使っていた全く同じやり方を持ち込んできていました。彼女は非常に扱いにくい子で、頑固だし、怒りを出すし、という子でした。しかし乍ら、良いスタッフが上手く彼女をシャワーに連れていったりすることで、最終的にはきちんとベッドで寝られるようにしました。次の朝、彼女が起きたときに、彼女はまだやっぱり怒りに満ちた少女でした。彼女は朝飯の場所に来て、シェルターが提供している素敵なグッド・ブレイクファースト（美味しい朝食）を食べるところにやって来ました。子どもたちが喜んで食べるようなシリアル＝コーンフレークスやその他の食事がありました。しかしながら、その食事の場所でも彼女は、外でいつも彼女が立ち振る舞っているような、お友達のなかの女王様、ちょっとスカシた女王様のふりをしていました。そのため彼女はここでも、見下した態度で、「なんてつまらないシェルターの食事なんだ、ここにはココパフはないんだ。」ということを行いました。ココパフというのは、シリアルのひとつの種類で、チョコレートがかかったパフ＝ちょっと膨らんだようなコーンフレークスです。しかしアメリカでは、よく言われているのですが、ココパフというシリアルは、そのシリアルの箱を食べるほうが、栄養価は高いと言われるような低質な代物です。

しかしながら、ソーシャルワーカーはこう考えました。「彼女とじっくり話してみたい」。そこで彼は 5 分間、シェルターから抜け出して、小さなココパフの箱を買ってきました。そしてシェルターに戻って、特別な態度は取らないで、彼女の朝食のテーブルの脇を歩き、ココパフのコーンフレークスを置きました。そして自分の仕事に戻ってきました。少女はもちろんココパフを食べました。そしてシェルターを出て行きました。私たちはその後、彼女に会うことはありませんでした。3 週間後に、彼女は戻ってきました。何ひとつ変わっていませんでした。同じような感じの悪い行動をし、同じようなことをしていました。次の朝、彼女のためのココパフはありませんでした。しかし彼女は、この施設に関心を持つことができました。彼女はまたシェルターを出て、2 週間戻ってきませんでした。2 週間後、彼女はまた戻ってきました。

彼女が徐々にスタッフを理解し、そして信頼できるようになると、彼女はもっと定期的に来るようになりました。8 週間ぐらい経った頃でしょうか、彼女は私たちのソーシャルワーカーのなかの 1 人に、「看護師さんに会わせてもらえるか？」と尋ねました。それは彼女がシェルターに来た本当の理由は、性的なことに関する質問、そして妊娠ということに関して聞きたいことがあったからです。私たちソーシャルワーカーは、子どもを理解することが、とても上手だと思います。これはとても良いソーシャルワークですが、

しかしながら、同時にこれは、プロテクティブ・プロセス、つまり防御要因生成プロセスという理論の良い例でもあります。さらにこれは、レジリエンスということと、私たちが行っている実践とを結びつける良い例だと思っています。

皆さんは、この写真を見て何かおわかりでしょうか。

テレビの番組で、ER=エマージェンシー・ルームという、テレビ番組の一場面です。どうして私たちはテレビで、お医者さんや弁護士さんのドラマを見せられるのでしょうか。私が個人的に思うのは、皆さんもおわかりだと思いますが、私たちソーシャルワーカーが行っている実践のほうがずっと興味深いと思います。さらにお医者さんや弁護士さんがすることに比べて、私たちソーシャルワーカーのやっていることのほうが、理論的にも実践的にも、もっと複雑なことだと思います。私がより興味を持つのはこちらです。皆さんは、ご覧になったかどうかわかりませんが、『プレシヤス』という映画の一場面です。ここにいるのはマライヤキャリーです。ソーシャルワーカーの役をしています。このソーシャルワーカーは、父親に性的虐待を受けた、オーバーウェイト、つまり体重過多の少女の相談を受けています。もし皆さんが、この2人の間にやりとりされているその交流の複雑さを理解すれば、ここに出てきているすべてのテーマが見られるはずです。そこで、私たちが文化を超えてもっと理解を深めていけば、ソーシャルポリシー、つまり社会政策や介入方法を作り出すことができるのではないのでしょうか。

最後に、私の話をお聞き頂き「ありがとう」の御礼を申し上げます。